

第33回原子力委員会定例会議議事録（案）

1．日 時 2003年10月14日（火）10：00～10：30

2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室

3．出席者 藤家委員長、木元委員、竹内委員、森嶋委員
内閣府
永松審議官、藤嶋参事官（原子力担当）、後藤企画官

4．議 題

- （1）「公開討論 再処理と核燃料サイクルを考える」の開催結果について
- （2）その他

5．配布資料

- 資料1 「公開討論 再処理と核燃料サイクルを考える」の概要
- 資料2 第32回原子力委員会定例会議議事録（案）

6．審議事項

- （1）「公開討論 再処理と核燃料サイクルを考える」の開催結果について

標記の件について、藤嶋参事官より資料1に基づき説明があり、以下のとおり発言があった。

（竹内委員）資料には記載されていないが、六ヶ所再処理工場について、プールの問題は建設中の問題であり、建設工事会社の瑕疵担保責任の問題であること、品質管理については、自立するシステムを確立していくためにISO（国際標準化機構）にも加盟し、実施していることについても発言した。

相手方の主張で気になったことは、「ワンスルーで実施する場合に比べて、フルラウンドのリサイクル路線で実施した場合は仕組みが複雑になる。だからうまくいくはずがないので核燃料サイクルは実施しない方がよい」という趣旨の発言があったことである。産業は難しい技術を使いこなし、

リスクを減らしベネフィットを得ることで進歩するものである。根本から考え方が違うと思った。

(木元委員) 相手方のパネリストから原子力委員会が出した「核燃料サイクルについて」の報告書のことを「原子力委員会の決定による」と話があったので、この報告書はこれで終わりという決定ではなく、これを元に説明するものであると訂正した。また、小木曽さんから「原点に返って」と記載されているが、結果は今までと変わっていないではないかという発言があった。そういうご懸念があることに対しては、基本的なことでもあるのできちんと応えるべきと思い、「核燃料サイクルのあり方に関する検討会」を、9回開催し、いろいろな方にご意見を伺った上でこのような報告書をまとめたことと、これからこの報告書を持って、いろいろな所にご説明に行く計画を話し、小木曽さんにも納得していただいた。公開討論が終わった後に、小木曽さんからまた話し合いたいという申し出があり、個人的にもコンタクトを取り話し合いを続けたいと考えている。時間に制限はあるが、公開の場でお互いの意見を聞き合い、意見を交換し合う意味の重さを感じた。

進行の仕方については、きちんと運行していくために打合せを何回もしたはずであるが、その通りに進んだのか懸念がある。司会の鳥井さんからは事前の打ち合わせとは違うことを行ったため、進行が思うようにいかなかったと話があった。事前に話すポイントを打合せたのならば、その通りに進めてほしい。司会には権限があると思うが、その権限がどの程度まで発揮できたのか考えると、あまりできなかったようなので残念であった。そのあたりからお互いが冷静に反省していきたいと思う。

また、司会の鳥井さんが良い提言をしたのだが、それが拒否されたのが残念であった。それは、お互いがリスクをどう定義しているのか、リスクが存在することについてどのような考えをもっているのか、次に安全についてどう考えているのか。最後に、合意形成についてどう考えているのか。どんなものにも、凶器の部分と利器の部分がある。リスクと安全は裏表の関係にあり、そのバランスについてどう考え、選択しているのかを確認したかった。リスクがあるのならば利用してはいけないのか、それともリスクを理解した上で、人類にとって利益があるのならば、ガードしながら利用していくのか、先方の考え方を鳥井さんは確認したかったのだと思う。それが拒否されたので、違う論点から議論しているように思えた。この討論会について新聞がかみ合わないとは記載したのはこのようなことがあったためであると思う。リスクについて、安全についてどう考えているのか、

合意形成についてどう考えているのか、という基本的な考え方をそれぞれが明確にした上で論議を進めようという提示であったと思うが、こういうところから公開の場で議論していかないといけない。

(森嶋委員) 新聞に議論がかみ合わずと記載されたが、民間団体側からの発言と政策について責任を持つ側との議論がかみ合わないことはやむを得ないと思っている。議論がかみ合わない理由は、いわゆる反対側に「原子力はいやだ」「核燃料サイクルはいやだ」という結論が先にあることであると思う。原子力はいやだということに対して、なぜそうなったか論理的に説明することは難しいことである。核燃料サイクルをやらなくても良いではないかという意見に対し、それではどうすれば良いのか聞いてみると、それに対する答えを持っていない。低エネルギー社会にすれば良いではないかという意見もあるが、エネルギー消費量が増えている状況で、何をすれば低エネルギー社会になるのかについての答えを持っていない。しかしながら、原子力委員会として、単にそのような意見は受け入れられないということではなく、今後も、なぜこういう政策をとっているのかについて説明していかないといけないと思う。特にエネルギー政策は20年先、50年先を考えながら、今から実施していかないといけない。明日から稼働させようと思っても技術が伴ってなければできない。特に原子力は高度な技術が必要なため、現在動かないからといって止めるのではなく、20年30年かかる技術の開発、実際に動かすための高度な技術者を習熟させていかなければ間に合わないことを理解していただけない。

今後原子力委員会としては、原子力という高度な技術と、長期的な視点を持っていないと、いざというときに間に合わない政策であることを示しながら、それについて論理を立てていくべきだと思う。コストの問題についても、原子力に限らず、長期的なものについては前提をおき、過去のサンプルからの推測に基づいて算出されるものであり、前提を考えたり、不安定要素の評価を変えれば結果はまちまちになってしまう。政策の責任者として、長期的になればなるほど不確実性が大きくなるため、確実性が増すまで何もできないということでは済まされない。そのことを、ジャーナリズムを含めてきちんとわかりやすい言葉と論理で説明していくことを続けたい。

この公開討論に関していえば、原子力委員会が説明したことに対し、先方は分からないと言いつつも反論のしようがなかったのではないかと。今回は想像していた以上に成功したと思う。これから原子力委員会としてはきちんとした論理をたてながら説明していき、相手方からも論理に基づいた

反論があれば、それに基づいて柔軟に対応していくという姿勢が示せたのではないかと評価している。

（藤家委員長）かつては、長期的な展望を見ながら直近の５年について考えてきた。しかしながら、現行の原子力長期計画は世紀という言葉を使い、５０年先を見ながら考えるということになっているので、今回のような議論が意味のあるものになるのではないかなと思う。このような議論は聞いている方々にどう受け止めていただいているかが議論をしている相手にどう伝えるかよりも重要であると思う。

（藤家委員長）今後につなげる方法が何か見つかったか。

（木元委員）リスクに対してどのような姿勢で臨んでいるのかということから始めると面白いものになると思う。

（後藤企画官）木元委員からのご指摘の点について、先方と単独での打合せを８回、司会の鳥井先生を交えての打合せを２回行った。何を議論するかについては、両者の合意があって、話が進んできたと考えている。先ほどのリスクの話も打合せで鳥井先生から問題提起があり、本番で取り上げることが合意されていた。当日会場でやらない方が良く提起するならば、合意に至るまでの話し合いの際に提示があっても良かったのではないかな。この件に関しては、今後のためにも整理しておきたい。

（木元委員）お互いの話し合いが何回もあった上で、当日の進行がうまくいかなかったことに、当方も鳥井さんも疑問が残ったのではないかな。その点についてはもう一度整理しなくてはならない。

（藤家委員長）これから話し合いを続ける上で、何を考えていかななくては行けないか、もう一度森脇委員にまとめてもらいたい。

（森脇委員）核燃料サイクルを進めることが目的だという訳ではなく、一般の方々に核燃料サイクルについて考えなくては行けないと思ってもらえるように、原子力委員会が考えていることを、論理的、継続的にきちんと説明していきたいと思う。

（木元委員）先方から核燃料サイクルのコストをなぜ公開しないのかという話があった。よくよく話を聞いてみると、核燃料サイクルコストの試算を最初に行った平成４年当初のことであった。森脇委員から情報公開に基づいてきちんと請求してほしいこと、請求があれば公開できるものはきちんと公開し、公開できないものは、公開できない理由を付けて公開しないことになるという説明を行ったが、いきなり公開していないと発言されると、会場が混乱する。

（竹内委員）今回のような議論を行うと、「あれもうまく進んでない、これも

うまく進んでない、だから核燃料サイクルはうまくいくわけがない」となる。現在起こっている悪い事例だけ並べて、だからやめようとしか聞こえない。

（藤家委員長）このような場の特徴として、相手側に一貫性を求めるのは難しい。それを要求したら何も成り立たなくなる。むしろ、相手側よりも聞いている方々がどういう印象を持つかが重要である。今後は、聞く側の気持ちになって、議論をする相手側がどういう方が良いのか考える必要がある。

（木元委員）今後は、リスクに対してどういう姿勢をお互いが取っているのか、安全に対してどういうイメージを持っているのか、どういうことを合意形成というのか、このような定義をきちんと踏まえた上で、話を展開していくことが重要である。

（２）その他

- ・事務局作成の資料２の第３２回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。
- ・事務局より、１０月２１日（火）に次回定例会議が開催される旨、発言があった。